

1 学校教育目標
 熊本県教育委員会の「令和2年度(2020年度)県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「令和2年度(2020年度)人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、生徒一人ひとりの個性を伸ばし、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。
 全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。
 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

2 本年度の目標
 ①全職員が資質と指導力の向上及び授業改善に努め、生徒一人一人を理解しその個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び考え行動する、逞しく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。
 ②中高一貫の6年間及び高校3年間教育課程研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。
 ③地域の小中学校等との連携をより一層深め学校の見える化を図り地域に開かれた学校づくりに努める。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	自己評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	業務改善	生徒一人一人と向き合う時間確保の工夫	校務の精選と業務時間の見直し	・校内連絡システム(Chat&Messenger)を活用して会議を削減する。 ・中学部会の計画的・効率的な実施	A	・校内連絡システムを効果的に活用して、諸会議の削減、縮減ができた。 ・中学部会は必要最小限に実施し、生徒と向き合う時間の確保ができた。
		宇土未来探究講座の安全かつ効率的な運営	宇土未来探究講座のPDCAサイクルの確立	・直後プランを作成し、次年度に活かす。 ・資料の事前配付を行い、担当者会等の時間短縮を図る。	A	・コロナ禍で体験活動の中止や内容変更をせざるを得なかったが、県のリスクレベルが高い状態でも実施可能な宇土未来探究講座の次年度プランを作成することができた。
	働き方改革	風通しの良い職場環境づくり	教職員の意識改革と業務の平準化	・教職員と面談や働き方等の情報提供を行い意識改革を図る。 ・中学主任会を定期的に行い業務の精選や平準化について検討する。	A	・教職員同士でコミュニケーションを取りながら効率的な業務の遂行を果たすことができた。 ・中学主任会を定期的実施し、体験活動の実施判断や各学年の情報共有を図ることができた。
		教職員の健康及び福祉の確保	部活動の計画的な運営と積極的な年休取得	・部活動の活動計画を作成し、ホームページに掲載する。 ・年休が取得しやすい職場環境の構築と計画的な年休の取得の推進を図る。	A	・部活動の活動計画を作成し、毎月ホームページに掲載した。 ・年休取得の計画表を作成し、教職員で共有することで計画的な年休取得の推進を図ることができた。
学力向上	授業の充実と学習意欲の向上	全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践	生徒の理解度・満足度90%以上の達成	・行事の精選と教育課程の工夫による授業時数の確保 ・新学習指導要領の共通理解と実践 ・研究授業の充実	A	・教育課程の工夫により、授業時数の確保ができた。 ・新学習指導要領に基づいた、「熊本の学び推進プラン」を周知し、研究授業を行った。
	自学力の育成	宅習時間の確保と定期考査の成績向上	・宅習時間の確保(宅習時間調査で、校内平均平日:90分以上、休日:150分以上)	・集会や学級通信で宅習の重要性や目標時間の啓発 ・行事予定表及びワークシートを使った、生徒に見通しを持たせる指導 ・オンライン授業を含む自宅学習指導の工夫 ・教科における課題量や提出日等、バランスの確保	B	・テストを目標に設定し、学級通信で啓発を行い、生徒に「見通しシート」で、学年に応じた「段取り力」をつける指導を行った。 ・オンライン授業がいつでも行えるよう環境を整えた。 ・教科における課題量や提出日等、バランスの確保ができた。

キャリア教育 (進路指導)	6年間を見通したキャリア教育	望ましい勤労観・職業観の育成	将来の展望を持ち、基礎的汎用的能力を身に付けるため、主体的に努力する態度の育成	・職業講話や体験活動 ・系統立った計画的な進路研究	B	・コロナ禍で、職業体験は実施できなかったが、職業講話は対策を講じながら実施できた。 ・進路学習の系統的实践について検証の場が必要。
			進路講話等の満足度90%以上	・高校進路指導部と連携し、進路講話や合格体験談を聴く会の実施	B	・進路講話を1回開催し、3月に合格体験談を聴く予定であるが、早い段階からの意識付けが必要。
		将来を見通したキャリア構想	自己実現につなぐキャリアパスポートの作成100%	・教科学習、教科外活動、学校外の活動の3つ視点と相互評価を取り入れたポートフォリオ作成	B	・キャリアパスポートの作成は行っているが、活用方法を検討していきたい。
			職業を見据えた進路目標の設定度80%以上	・各種面談を実施し、教師が対話的に関わり、個性を伸ばす取組の実践 ・3年次におけるパネルディスカッションの実施	B	・各学年、定期的に面談を実施し、生徒の話を聞き、個性を伸ばすことができている。ただ、将来の展望を持つ生徒がやや少ない。
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	服装・あいさつ・掃除の徹底	全職員による生徒指導と生徒に寄り添った配慮ある対応の実践、教師の率先垂範	・全ての指導における「凡事徹底」の意識涵養 ・学年集会時の整容検査と事後指導の徹底 ・キャプテン・部長会によるあいさつ運動の実施	B	・挨拶や掃除など、指示されるところであるが、自ら考えて動くという点についての意識は低い。今後もリーダー育成に力を注ぎし、自律的な行動ができるようにしていく。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通ルール遵守率90%以上、交通事故・苦情1%以内	・定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示 ・交通安全教室の実施	B	・規範意識が低い生徒が目立った。集会や学級で定期的又は継続的な指導をしていく。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、アンケートによる満足度90%以上	生徒総会、文化祭、クラスマッチの見直しと、より一層の充実	A	・リーダー研修やキャプテン・部長会議に取り組みすることで、執行部や各委員会や部リーダーが工夫や改善しながら
		各種委員会活動の活性化	目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成感90%以上	・生徒会執行部の主体による各種委員会の開催と年間計画に沿った活動の実施 ・各種委員会の常時活動の活性化	A	・年間計画を意識し、学校生活を有意義にするために必要な活動を実践できるようになってきている。常時活動をさらに活性化していく。
人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	生徒一人一人が自己を大切に、他者を思いやりながら、いじめや差別を許さない態度の育成	・人権意識、自尊心の向上、自己肯定感90%以上	・各クラスでいじめ防止スローガンを策定し、学期ごとに見直しを図っていじめを許さない態度を育成する。	B	・各学級でのスローガン策定はできたが、学期ごとの見直しが不十分になった。また、自尊心や自己肯定感を持たせる取組が弱かった。
	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確認と実践力の向上	・職員研修の実践、校外の研修への全員参加 ・いじめ差別事象発生時において危機管理マニュアルを活用した迅速な対応	・教育実践の相互研鑽を行い、人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員集団作りに取り組む。 ・危機管理マニュアルの周知徹底を図る。	A	・校内研修の実施が十分ではなかった。 ・危機管理マニュアルの周知徹底のために、短時間で周知できる仕組みが必要。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒への的確な対応	生徒の特性に合わせた支援	・生徒理解を踏まえた適切な支援の実践 ・個別の教育支援計画及び指導計画を基にした支援の充実(全員作成) ・不登校傾向の生徒への支援と、カウンセラー室の効果的な活用	・特別な支援を要する生徒に対する全職員の共通理解を図り、環境整備に努める。 ・保護者やSC、SSWを始め外部専門機関とも協力・連携を図りながら、ケース会議を開催するなど、組織的な支援を進める。 ・外部講師による職員研修を実施する。	A	・中高合同で生徒理解の研修を6月と9月に行い、中学部で4月に1学期分、9月に2・3学期分の個別の指導計画について共通理解を図ることができた。 ・コロナ禍でもあり、外部講師による研修は実施しなかった。 ・保護者と連携しながら効果的な別室での学びや支援をすることができた。
		ストレス反応を示す生徒への支援	・SCとの定期的な面談の実施 ・関係機関との連携	・学校、家庭などの生活環境に起因するストレス反応を示す生徒をSCやSSWにつなぎ、ストレスへの対処方を学ばせる。	A	・生徒や保護者がSCと定期的に面談を行い、落ち着いた学校生活を送っている。SC講話を2年に実施しストレスについて学んだ。

いじめの防止等	いじめの問題に向けた生徒と職員の協働と、組織的な対応力の強化	いじめの未然防止と、いじめ根絶に向けた主体的な態度の育成	・アンケートの結果を基に、職員と生徒が協働する仕組みを作る。	・ざりアンケートを毎月実施し、その結果を担任や生徒会にフィードバックし、未然防止の取組を継続的に行う。	A	・ざりアンケートの集計により、生徒の回答状況を職員で共有できた。聞き取りが不十分で、トラブルが再発したケースがあった。
		いじめの早期発見、早期対応ができる仕組み作り	・ざりアンケート実施後速やかにとりまとめ、情報を共有する。	・いじめ等を把握し、速やかに中学部会や適応委員会と連携し、発見後の対応を組織的に行う。	A	・ざりアンケートや中学部会、適応指導委員会などの連携で、組織的に対応することができた。
地域連携(コミュニティスクールなど)	情報発信	地域への丁寧な情報発信	HP・ブログの改善による配信の充実	・簡便に情報把握ができるよう、CMSの特性を生かしたりデザインを図る。 ・年度当初の14万ビューから、倍増を達成する。	A	・HPを一部修正し、Google-Classroom, コナ情報, 入試情報等への接続利便性をあげることができた。 ・閲覧数も年度当初の14万から、倍以上の30万ビューを達成した。
	コミュニティスクール	学校運営協議会(総合型)の実働	運営協議会(総合型)を実働させながら、学校課題を焦点化させる。	・地域と連携することで、どうしたら学校課題の解決を図ることができるか協議する。 ・ICTを活用した簡便で機動的なアンケート集約体制をつくる。	B	・新型コロナウイルス対策により学校での会議開催ができなかった。資料検討による意見交換に替えた。 ・保護者へのICT(Forms等)を活用した機動的なアンケート集約体制はできつつある。
図書館活動	読書活動の活性化	利用しやすい図書館作り	図書館からの情報発信の充実	・校内読書月間の実施 ・広報誌「らいぶらりいたいむず」の定期的発行 ・特設図書コーナーや展示の工夫 ・HPブログでの情報発信	A	校内読書月間を7月と12月の2回実施し、「らいぶらりいたいむず」を毎月合計9回、新着図書案内を16回及び図書館報を発行した。特設図書コーナーは毎月工夫し、HPブログに13回図書情報を掲載した。
		朝読書の充実	生徒の朝読書に対する満足度7割以上	・読書計画に従い、3年間を見通して朝読書に取り組む。 ・読書クラスマッチを行う。	A	「朝読書」のアンケート結果より、83%の生徒が朝読書は必要な時間であるとし、82%の生徒が毎日計画的に読書に取り組んだ。また、多読クラスマッチを年2回実施した。
SSH	第二期実践型、研究開発課題「未知なるものに挑むUTO-LOGICで切り拓く探究活動の実践」の中間評価	UTO-LOGICを備えた人材育成の評価方法を開発する。	6年間を見通した宇土未来探究講座「卒業研究」と高校「ロジックプログラム」の接続	中学卒業研究と高校課題研究を連携する機会、情報交換、共有を図る機会・方法を充実させる。	A	中学卒業研究のテーマ設定指導やロジックスーパープレゼンテーションへの代表発表機会及び視聴の機会設定ができた。生徒間のピアレビューが充実することを今後の方策に位置づけたい。
			探究活動のガイダンス機能及び情報共有の機会の充実	ロジックガイドブック及びGS本によるガイダンスとGoogle Classroomによる探究に関する情報共有を充実させる。	A	Classroom運用で情報共有、ペーパーレスを図った反面、手元資料の不足、生徒間での連絡徹底の差が課題となった。1人1台端末の活用法と運用の模索が必要である
		探究活動及び探究の「問い」を創る授業の実践の見える化”可視化”教科の枠を越えた授業の開発	探究活動の過程における職員・生徒の関わり可視化	G Suiteを活用し、Googleドライブによる探究活動の過程の共有・情報交換を充実、探究の過程の可視化を図る。	A	Googleドライブ運用により、特に1学年でUSB廃止、データ共有・共同編集など新たな実践を進めることができた。次年度はカレンダーなど計画の可視化を図る。
			探究の「問い」を創る授業、教科の枠を越える授業の実践を共有する機会を設定する。	公開授業(探究の「問い」を創る授業)及び職員研修(探究活動の指導方法)を実施し、コンピテンシーベースの授業デザインの展開を図る。	A	コロナ禍で公開授業及びWS型職員研修が未実施。オンライン公開授業、デジタルWS型職員研修など授業・探究実践の共有機会を次年度は設定。

中高一貫教育	宇土校ならではの 中高一貫教育プログラムの 充実	中高連携した学校行事・生徒会活動の充実	体育祭、文化祭等の合同行事における一体感の醸成と、満足度90%以上	・生徒会を中心とした行事の工夫と実践 ・保護者(PTA)と一体となった行事の工夫	A	・制限のある中、文化祭やクラスマッチなど、生徒主体で実施することができた。 ・コロナ禍のため保護者(PTA)との行事はほとんどできなかった。
	地域に開かれた特色ある学校づくり	地域への丁寧な情報発信	県立中学校入学者選抜における志願倍率1.6倍	・宇土中新聞を毎月発行し、小学校と地域に発信する。 ・年度当初から小学校等の訪問を実施する。	A	・多くの学校行事、体験活動が中止となったため宇土中新聞を作ることができなかった。 ・コロナ禍ではあるが宇土市・宇城市・熊本市など多くの小学校を年4回訪問し、宇土中の教育活動について情報発信を行った。

4 学校関係者評価

・特に新入生は、コロナ禍で不安も多いことだったと思います。「学びを止めない」ということで、臨時休業中の学習計画もしっかりされていました。このことが、授業の良い評価にもつながっているのだと思います。

・「スマホの使用と学習時間の確保」が課題にありましたが、スマホ、PCの使用については、家庭環境・保護者にもかなりの課題があることでしょう。安価で膨大な内容を受容できるようになれば、今から益々見守らなければならない課題だと思います。

・火おこしや飯盒炊飯の体験活動もなされていましたが、学んだことを自分の身の回りから活かせる生徒さんになってほしいですね。

・中高一貫教育の中、教師の授業実践は、一人の教師が中学と高校両種の授業を担当し、生徒教師双方から互いの顔が見えるような教育環境の意味は大きいと考えます。「学び」を通して「観の形成」を育むという考えに立てば、様々な困難性はあると思われそうですが、一考に値すると思います。

・「キャリア教育」について、評価は全て「B」となってます。特に「将来を見通したキャリア構想」については、半数の先生が「やや不十分」であると評価されています。高校においても同様な評価であるため、キャリアパスポートの活用方法の早急な見直しが必要であると考えます。

・中高一貫のメリットがあまり見えない。進学者一覽も中進生、高進生と分けて提示はできないか。中学入学者が増えない理由として、中学の活動は分かるが、将来の進路が見えないからではないでしょうか。高校生活も含め、伝えないと保護者へのPRはできないような気がします。

・ホームページが以前と比べよくなりましたが、まだ見づらいためと思います。今回色々な資料があったものがホームページ内にもありましたが、探すのは困難でした。せっかくの資料も見つけやすいよう工夫された方が良いです。

・令和2年度はこれまで経験のない社会情勢で先生たちも大変なご負担となったことと思います。しかし、最も大切なことも再確認できた状況でもあったと思います。宇土中学校・宇土高校らしさ、宇土校でなければできない活動を行っていき、地域における宇土校の存在意義や生徒の人生における大変重要な時期の学びを豊かなものにしていただければと思います。PTAとしても全力でサポートできたらと思います。

・授業の満足度については、概ね良好ではありますが、教科によるばらつきも見られますので、生徒の声や保護者の思いを真摯に捉え、課題が認められる点については共通理解し改善策を講じていくことが重要だと思います。

5 総合評価

今年度はコロナ禍で「無人島サバイバル生活体験」等が中止となる中、「菊池のんびり農村生活体験」等、各学年最低1つは内容を変更し、最大限の感染予防対策を講じて、体験活動を実施することができた。学校経営においては、県のリスクレベルが高い状態でも実施可能な宇土未来探究講座の次年度プランを作成するなど、宇土未来探究講座のPDCAサイクルの確立が図れた。また、年休取得の計画表を作成し、計画的な年休取得の推進を図るなど、教職員の健康及び福祉の確保に努めることができた。学力向上については、教育課程の工夫により、授業時数の確保をすることができた。また、人権教育の推進と特別支援教育についても多様な課題や特性を持った生徒に対して、SCやSSW、保護者と連携しながら1人ひとり寄り添った支援を行うことができた。一方で、キャリア教育の全ての項目がB評価となり、本来であれば中高一貫校の強みとなる6年間を見通したキャリア教育に課題を残した。総合評価としては、具体的目標が30項目ある中、21項目でA、9項目でBとなり、全体の約7割がAとなる高い評価を得るなど、概ね目標を達成することができたと考えます。

6 次年度への課題・改善方策

自学力の育成、望ましい勤労観・職業観の育成、将来を見通したキャリア構想に課題がある。学びに対する意識の向上、授業と家庭学習の繋がり、キャリアパスポートを活用した進路指導などを充実させて主体的な学びができるよう仕掛けをしていく。また、生徒指導についても生徒たちが自らあいさつや掃除を行うように動機付けしているが十分ではない。交通ルール遵守についても同様である。引き続き「凡事徹底」を意識させながら粘り強く取り組んでいく。次年度も生徒1人ひとりの夢実現に全力でサポートできるよう働き方改革の視点も踏まえながら、全職員が資質・指導力の向上及び授業改善に努める。また、生徒一人一人に寄り添いながら、保護者、SC、SSW等の方々と連携を深め、計画的、組織的に生徒理解に努めていく。